

明日で、東日本大震災から3年を迎える。松江駅でも、昨年が続いて社員参加でのチャリティーコンサートを予定している。

神戸出身の私としては、「震災」と言えば、一生忘れ得ぬ記憶、そして人生の転機としてよみがえる。それが1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災である。

当時は東京で学生生活を送り、翌年には霞が関の官庁街で日本を動かそう、なんて考えていた。しかし、発生から4日後、神戸市東灘区の実家へ出向き、大好きだった故郷の惨状を目の当たりにして「この地域のために自

分には何が出来るか」という思いで胸がいっぱいになった。
そして発生から1カ月半後、春休みを利用して、実家の近所で崩壊した旧家のがれきの撤去を手伝うことにした。何日も積み重なったがれきを毎日毎日運ぶ単純作業だ。
それまで力仕事など何一つもしたことがなかった私が、スコップや手押し車の使い方や、セメントと水と砂を一定の割合で配合し、ブロック塀を造っていくことを初めて学んだのもこの時だ。
さらに1カ月が過ぎ、

市民の力 阪神大震災で知る

阪神淡路大震災で倒壊し、がれきの山が残ったままの住宅地
1995年4月6日、神戸市東灘区本庄町で共同通信社へ
りから(資料)



ようやく更地が見えてきた4月1日、神戸ではJR西日本の東西のレールがつながり、街は歓喜と希望の声であふれた。この数カ月の経験を経て進路を決めかねていた私は、その後、地元に残場のあるこの会社を選んだ。

震災から何年もたち、

忘れ得ぬ記憶

すっかり神戸の街も復興したある日、がれき撤去を手伝った家のご主人が「あの東大卒の子が汗水垂らして造ってくれた塀を、家の事情で、壊しても構わないだろうか」と、わざわざ訪ねてきてくださった。まだ残してくれていたんだ、でも、考えてみれば、あれが今の私のすべての原点だった。涙があふれた。
神戸市民は本当に神戸

人口が減る中、現在の神戸市の人口は震災当時を上回っている。

地域や街をつくるのは、指導者や重機が存在だけではない。むしろ、最も大事なのは現場の市民一人一人の汗と涙、そして希望だ。それを教えてくれたのが震災だった。

(内山興・前JR松江駅長、現JR松江支店長)
第2、4月曜掲載

が好きだ。阪神淡路大震災の直後、復興に10年も20年もかかるかもしれないと言われたとき、ある新聞が「これからも神戸に住み続けたいか」という調査をしたら、なんと9割以上の市民が「はい」と答えた。6千人以上の死者を出した震災から19年。日本全体の

